

臼井吉見の「出会いと対話」の物語

臼井は、昭和49(1974)年東筑摩塩尻教育会総会に招かれ、こう語っています。「なるべくちがった人間との対話、意見が違うからこそ、耳を傾けて聞き入り、それによって自分を高めることが可能になるわけでありませう。そういう世界を全面的に繰り広げようというのが『安曇野』のもくろみでありました。あり得ない対話を含めて、千人近くの登場者の対話を繰り広げました。それらの人は、それぞれが主役であって、脇役は一人もない。堂々たる一個の主役として描いたつもりであります。」臼井が著した小説『安曇野』は、臼井自身が生き方の根本とした「出会いと対話」を具象化したものです。その一端を紹介します。

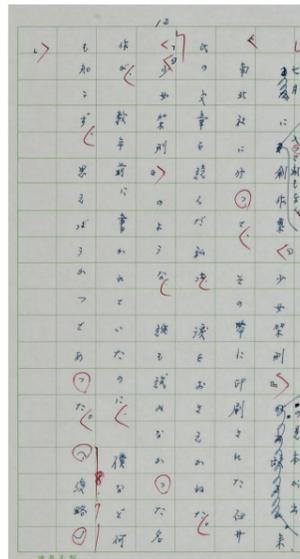
川端康成 臼井吉見宛書簡

昭和44(1969)年11月に記されています。この年4月臼井は、糖尿病治療のため虎の門病院に入院、10月に退院しています。自身の治療と重ねながら臼井の無事退院を安堵している内容が綴られています。企画展では、翻刻文と併せて展示します。



吉村昭 著『私の文学漂流』

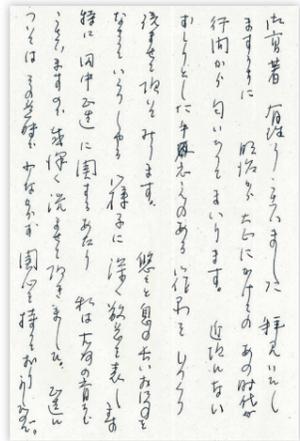
吉村昭は、『私の文学漂流』(1992年新潮社)第11章「会社勤め」の中で「七月に入って間もなく、創作集『少女架刑』の見本が出来、南北社に行って、その帯に印刷された臼井氏の文章を読んだ私は、涙をおさえかねた。『少女架刑』のような、誰も試みなかった名作が、数年前に書かれていたのに、僕など何も知らず、思えばうかつであった。(後略)「文学者」を受け取られることをこぼまれて臼井氏の家を出た時、激しくよろめいた自分のことがよみがえった。この一文を読んで、小説を書きつづけてきてよかった、生きていてよかった、と思った。」と記しています。令和3(2021)年吉村昭のご遺族吉村司氏から、臼井吉見宛書簡の公開許諾についての文書をいただきました。「母曰く、父は臼井吉見氏を非常に尊敬していた。褒められると天にも昇る心地だったと先ほど夕食の席で話題になりました。」の一文が添えられていました。吉村昭は、臼井吉見文学館開館1周年記念講演会において「臼井先生のこと」と題した講演を行っています。



<吉村生原稿(吉村昭記念文学館)>

永井路子 臼井吉見宛書簡

東京女子大での教え子の一人永井路子の『臼井吉見集2』の月報です。「戦後、評論家として活躍されている先生を「遙拝」しているうち、思いがけない機会がやってきた。『婦人公論』に「15年目のエンマ帖」というタイトルの企画があり、歴史ものを書きはじめていた私も御指名にあずかったのである。まだ、懸賞小説に入選したくらいで、雑誌社勤めをしていたころのことだ。先生の御質問は鋭かった。ときどき、ぎよっとするような切り込み方をなさる。まさに十五年目に面接試験をうけている感じだった。しかし、書いて下さった御文章はやさしく、「武士の情」にあふれていた。本当のエンマ帖にはかなりきびしい点をつけられたのだろうが、と思いながら女子大の試験の記憶をよみがえらせていた。」令和3(2021)年9月14日、自筆の書簡資料公開承諾の一筆が当館に届きました。



市有形文化財「清澤洌文庫」を紹介します

当館で保管する『暗黒日記』をはじめとする清澤洌ゆかりの資料一式(清澤洌資料)が、「清澤洌文庫」として令和6(2024)年6月26日に市有形文化財に指定されました。「これらの資料がふるさと安曇野に一連のものとして揃っていることは非常に意味のあることで、清澤の足跡や交友関係などを現代に伝える系統的にまとまった、学術的に価値の高い資料」と評価され、指定に至りました。

ここでは文化財指定を記念し、「清澤洌文庫」の一部を紹介します。どの資料も当館で複写物を閲覧できますので、ぜひご利用ください。

『戦争日記(暗黒日記)』(清澤洌資料 No.1~4)



『戦争日記』は、昭和17(1942)年12月から亡くなる直前の昭和20(1945)年5月まで書かれた清澤の戦時中の日記です。清澤の死後、昭和29(1954)年に『暗黒日記』(東洋経済新報社)として刊行されました。当館ではこの原本4冊を保管しており、日記の全文を読むことができます。

この日記には、当時の政治や外交、戦争政策などが記録され、清澤自身の考えや批判も書き込んでいます。清澤の字は癖があって少し読みにくいところもありますが、日記の原本を読んで、彼の思想に直接触れてみるのはいかがでしょうか。なお、『戦争日記』の原本は「信州デジタルコモンズ」(運営: 県立長野図書館)において、アーカイブ化した資料を公開していますので、ぜひご利用ください。



(清澤洌資料 No.40「アルバム2」より)

清澤 洌

(明治23(1890)年-昭和20(1945)年)

旧北穂高村青木花見(現安曇野市穂高北穂高)出身のジャーナリスト。明治36(1903)年に研成義塾に入り、井口喜源治のもとで学んだ。明治39(1906)年に渡米し、邦字新聞の記者として活動した。帰国後は、中外商業新報社、また朝日新聞社の記者として活動するかたわら、政治や外交、社会情勢等に関する数々の書籍を執筆した。

「スクラップブック」(清澤洌資料 No.42、No.120~129)

資料の1つに、清澤に関する新聞記事をまとめた「スクラップブック」があります。このスクラップブックは、清澤の妻 綾子が作成したもので、大正12(1923)年~昭和17(1942)年の清澤自身が書いた記事や、清澤のことについて書かれた記事があります。右の写真は、綾子が新聞を切り抜いている様子を撮影したものです。綾子が丁寧に記事を保存してくれたおかげで、清澤の思いの一端をうかがい知ることができます。



<清澤洌資料No.41「アルバム3」より>

資料群の中には他にも、書籍や論文、講演集、吉田茂や石橋湛山等から出された書簡類、プレスカード等の愛用品もあります。清澤洌や「清澤洌文庫」(清澤洌資料)についてもっと知りたい方は、『安曇野市文書館紀要 第3号』(1冊500円(税込))に、これらの資料を用いた企画展「多元主義社会を生きる~自由主義擁護の旗手清澤洌の思想を通して~」についてまとめているので、ご覧ください。



<清澤洌資料No.127「スクラップブック」>